

令和4年度

関係人口創出・拡大のための
中間支援モデル構築に関する調査・検討業務

業務実施報告書
(概要)

団体名	一般社団法人いわて圏
事業名	「探究型学習」を起点とした10代～20代の長期的なつながりモデル構築事業
選択テーマ	まなび関係人口

- 自分の興味関心や地元をフィールドに「探究型学習（特に実践活動を伴うマイプロジェクト）」を行う高校生が、卒業・転出後も岩手とつながりながら「関係人口」として地域に関わり続けられる仕組みやモデルを構築した。
- また、県内の高校を卒業・転出した10代～20代の希望者が地域に関わり続けられる新たな「まなび関係人口」の形をつくることを目指し、構築した仕組みが機能し続けるための中間支援モデルを検討した。

主な活動内容

1. まなび関係人口創出に向けた調査・検討

- 探究型学習等に関わる行政、高校、各種団体等へのヒアリング調査を実施（25か所）
- 本テーマに関するモデル検討ワークショップを実施。

2. 地域をフィールドにした「探究学習プログラム」の実施

- 高校1～2年、高校3年、OBOGを対象としたマイプロジェクトプログラムを実施し、合計48人が参加。
- 全国高校生マイプロジェクトアワード岩手県summitへ4組（12人）が出演。OBOGは7名が参加協力。

3. 長期的つながりプラットフォームの構築

- SNSやLINE等を活用した情報共有・連絡ツールを構築。
- つながりを維持・発展させるオン/オフラインの仕組み化。



モデル検討ワークショップでの議論



プログラムで高校生と地域の大人が交流

主な成果

1. 参加者や地域の声

- 地域キーマンや自治体等からは、探究学習を通じて転出前に、高校生と地域の大人がつながることの有効性を実感する声が多く、**事業展開の大きな手ごたえ**があった。
- 高校生等からは、**自分の興味関心に基づいた探究活動やマイプロ**を地域の中で実践**できる**した経験を**通じて**経て「地域への愛着」や「これから今後も深く関わりたいという意欲」が**沸いた**という声が多く寄せられた。
- 高校教員側からは、探究活動を応援・伴走する大人との連携ニーズが強く、地域社会全体で関わることの重要性が増している。

2. 事業を通じて得られた気づきや知見

- リアルな場や機会の熱量や、原体験としてのインパクトが強いことで、はじめてオンラインが活きる。**リアルとオンラインを一体的に考えるプラットフォーム（コミュニティ）形成**が大事である。
- 高校生、地域（行政）、高校の**想いが重なる地点**をみつけ、高

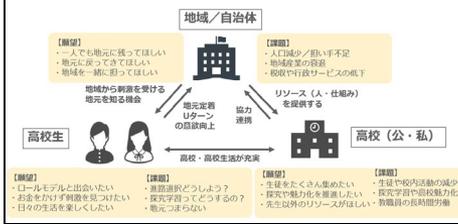


高校生や伴走者が集う岩手県summit

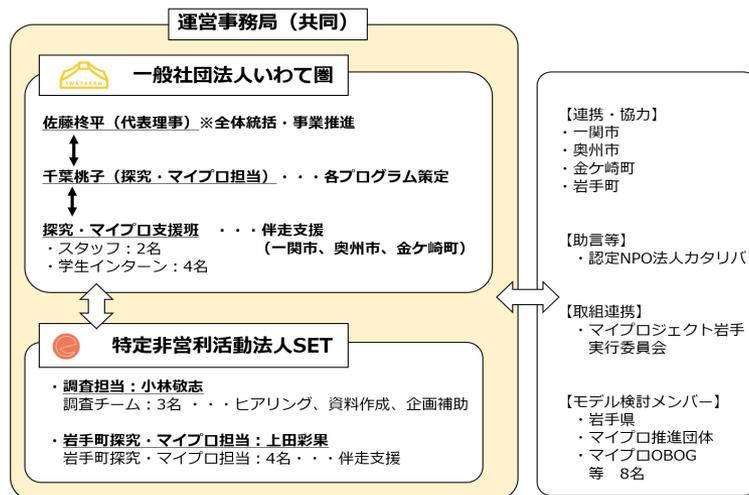


県外在住のマイプロOBOGのコミュニティ

課題解決のための取組と成果

課題	対応結果
<p>1 プラットフォームのあり方の調査・検討 探究型学習（マイプロ）を行った高校生が、継続的に地域と関わりをつくるための手法やツール、機会について、何が最適なのかを見つけ、その仕組みを検討する必要があった。 そのため、探究型学習やマイプロに関わる関係者等や、高校生・OBOGへのヒアリング調査を行いあり方を検討した。</p>	<p>（方針1）オフラインとオンラインの融合によるプラットフォーム形成 【オフライン】…マイプロアワード等のリアルな場での交流や繋がりがづくり。 【オンライン】…「岩手全体」「地域（市町村ごと）」のコミュニティ運用。</p> <p>（方針2）LINEを活用したコミュニティ形成 利用者の年齢層や心理的ハードルが低いLINEを活用し、①岩手全体のグループ、②市町村ごとのグループに分けて、伴走者が中心となって運用する。</p>
<p>2 ステークホルダーのニーズや連携方法のあり方 関係人口を求める地域（行政）ニーズと、新しい探究型学習における高校（教員）ニーズの融合点を見出し、理想とする中間支援モデルの形を見出す必要があった。 ステークホルダーや当事者を交えたヒアリング調査を行い、連携方法についてモデル検討ワークショップで議論・検討した。</p>	<p>■ 把握したニーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> 自治体：人口減少、地域産業衰退 高校：探究学習、高校魅力化 高校生：進路選択、探究の仕方 <p>■ 連携のあり方 3者の想いやニーズが重なる地点を見つけて伴走する中間支援機能</p>  <p>【地域/自治体】 ・人口減少/魅力不足 ・地域産業の衰退 ・人口減少/魅力不足 ・地域産業の衰退 ・人口減少/魅力不足 ・地域産業の衰退</p> <p>【高校生】 ・進路選択の悩み ・探究の仕方 ・探究の仕方 ・探究の仕方</p> <p>【高校(公・私)】 ・生徒をたくましくしたい ・探究学習や高専魅力化 ・探究学習や高専魅力化 ・探究学習や高専魅力化</p>
<p>3 段階別に提供するプログラムの検討・実証 地域への継続的な関心と関与を生み出すことや、10代～20代が地域とつながり続けるためのプラットフォームへ参画する初期メンバーを募る必要があった。 事業実施エリアごとにプログラムを実施し、高校1～2年、高校3年、OBOG（大学生世代）で55名との繋がりを構築した。</p>	<p>■ 高校1～2年生向け：メリハリあるプログラムの策定・実施が重要 → 短期間の間に集中的に実施するか、高校ごとに分けた個別伴走の実施。</p> <p>■ 高校3年生向け：3年間かけた関係構築が、転出前のつながり強化に！ → 1～2年時の関係が希薄だと参加に至らないため、3年間かけて関係構築。</p> <p>■ OBOG向け：伴走者として地元の高校生と関わる立場・経験の機会提供 → 現役高校生の伴走と自分のキャリアを考える対面プログラムが有効。</p>
<p>4 継続的な運用モデル 本事業で構築したプラットフォームやプログラムを提供運用し続けるための「財源確保」「仕組み化」について検討した。岩手県内外の関連団体や取組のリサーチや情報交換を行いながら、岩手にローカライズする方向で議論・検討を深めた。</p>	<p>■ 財源確保の基本方針：多様なファンドレイジング → 自治体や企業・経済団体等とのタイアップ（委託、スポンサード）。 → 高校生の教育支援に活用できる財団法人等からの助成金を活用。 → 教育支援を軸にしたふるさと納税の寄付メニューの設置。</p> <p>■ 仕組み化の基本方針：伴走者の増加と情報共有 → 各地域に高校生の探究・マイプロの伴走者を増やし、省力化や機能分散。</p>
<p>5 長期的な効果測定の方法 今年度、並びに来年度以降も繋がりをもった高校生や大学生世代が、岩手に関わりたいという想いをもっているか、また、実際に関係人口としてかかわっている事例があるか、Uターン等の動きがあるのかを定期的に調査する方法を検討した。</p>	<p>（方法1）属人的な人間関係による把握・測定【半年～1年に1回】 → SNSやチャットツールを利用した伴走者によるコミュニケーション活動。</p> <p>（方法2）仕組みによる把握・測定【年1回】 → 同窓会的なリアルイベントとLINEによる個別案内によりインサイト把握</p>

事業実施体制・関係機関



団体名	役割
一般社団法人いわて圏	<ul style="list-style-type: none"> ・事業実施の全体統括 ・一関、奥州、金ケ崎での伴走支援
NPO法人SET	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒアリング調査の実施と取りまとめ ・岩手町での伴走支援
認定NPO法人カタリバ	探究・マイプロに関する助言やサポート
自治体（市町村）	<ul style="list-style-type: none"> ・運営事務局と連携した伴走支援 ・地域内での連携体制構築の協議

自立化・自走化の検討

観点	可能性	課題
①省力化した運営方法	マイプロ関連業務と一体的な運用	協働できる個人や団体の確保
②継続するための財源確保	多様なファンドレイジング	セクターごとのキャッシュポイント把握
③情報の蓄積と共有	まなび関係人口のリスト化と共有（市町村ごと）	情報セキュリティ体制・環境の構築

横展開の可能性

【1】岩手県内における横展開

- ①「まなび関係人口」のに興味を示し、取組に賛同する県内企業・自治体・各種団体等とのパートナーシップ関係の構築。
- ②社会教育セクターの参画や連携を促す。
 （公民館、市民センター、その他地域の学習施設等）

【2】全国における横展開

- ①「マイプロジェクト地域パートナー団体（19都道府県）」を通じたマイプロジェクト支援文脈での普及・拡大。
- ②「都道府県圏コミュニティ（4圏）」を通じた関係人口創出・人口減少対策文脈での普及・拡大。
 （いわて圏、にいがた圏、滋賀圏、とっとり圏、随時増加中）

探究型学習・マイプロジェクトを通じた「まなび関係人口」の創出は、新しい関係人口の領域ゆえ理解・普及に時間がかかるため、一緒に普及・拡大に取り組む個人・組織との協働関係構築とナレッジの共有が必要不可欠。

令和4年度
関係人口創出・拡大のための中間支援モデル構築に関する調査・検討業務
業務実施報告書

団体名	一般社団法人いわて圏
事業名	「探究型学習」を起点とした10代～20代の長期的なつながりモデル構築事業
選択テーマ	まなび関係人口

目次

1	課題の設定	2
1.1	事業の概要	2
1.2	事業実施地域の概要	2
1.3	関係人口の創出・拡大に取り組む目的	3
1.4	調査・検討すべき課題の設定	3
2	モデル事業の取組内容	5
2.1	取組の全体像	5
2.2	事業実施に係る運営体制	6
2.3	実施スケジュール	7
2.4	活動内容	7
2.5	課題解決のための取組	15
3	モデル事業としての成果検証	17
3.1	目標の達成状況	17
3.2	課題解決に向けた成果	18
3.3	その他の成果	21
4	今後の事業のあり方	23
4.1	自立化・自走化の検討	23
4.2	横展開の可能性	23

1 課題の設定

1.1 事業の概要

本事業は、自分の興味関心や地元をフィールドに「探究型学習」を行う高校生が、卒業・転出後も岩手とつながりながら「関係人口」として地域に関わり続けられる仕組みやモデルを構築するとともに、その仕組みが機能し続けるための中間支援モデルを検討し、10代～20代が地域に関わり続けられる新たな「まなび関係人口」の形をつくることを目指すものである。

1.2 事業実施地域の概要

(1) 岩手県一関市

岩手県最南端に位置し、人口約112,000人。平成の大合併で8市町村が合併し、面積は岩手県内で2番目に広い1,256.42km²。関係人口分野では、平成30年度より「遠恋複業課（総務省の関係人口創出モデル事業）」にも取り組む。本事業で対象とする高等学校は8校（公立：6校、私立：2校）で、直近の高校3年生世代はおよそ1,100人。

(2) 岩手県奥州市

岩手県南地域に位置し、人口は約114,000人。平成の大合併で5市町村が合併し、面積は岩手県で3番目に広い993.30km²。本事業で対象とする高等学校は8校（公立：7校、私立：1校）で、直近の高校3年生世代はおよそ1,100人。

(3) 岩手県金ケ崎町

岩手県南地域に位置し、人口は約15,000人。国内大手の工場等が集積するエリアもあるが、多くは農村地帯である。本事業で対象とする高等学校は1校（公立）で、直近の高校3年生世代はおよそ150名。

(4) 岩手県岩手町

岩手県中央地域に位置し、人口は約12,000人。農林畜産業が盛んである。本事業で対象とする高等学校は1校（公立）で、直近の高校3年生世代はおよそ120名。

1.3 関係人口の創出・拡大に取り組む目的

本事業の目指すものは、「探究型学習を行った高校生の将来的な関係人口化」である。自分の興味関心や地域課題に対する参画意欲のある高校生が地元をフィールドに「マイプロジェクト（以下「マイプロ」）」を行ったことで生まれた地元とのつながりを維持しながら、卒業・転出後も「関係人口」として地域に関わり続けられる仕組みとそのプラットフォームを構築することを目的とする。

岩手県では毎年、約7割の高校生が高校卒業と同時に県外へ転出している。人口減少が加速する中で新たな移住者を呼び込むことには限界があるため、地域とのつながりを持つ人を増やし、関係人口や将来的な移住を狙う関係性にある人を増やすことが重要課題となっている。

関係人口の関わり先としては、三大都市圏からのアクセスに優位性のある地域が好まれる傾向にあるとともに、移住先としても比較的温暖な西日本が好まれる傾向が様々な調査で色濃く出ている。その中で、岩手県が関係人口や移住予備軍を増やしていくためには、岩手とのつながりや接点が多い人をいかに確保していくかが大きな課題となっている。そこで、岩手を転出する前の高校生を対象に、将来的な関係人口や移住予備軍としての関係性づくりを行うことに着目し、本事業を実施するに至った。

事業実施地域は、県内でも人口が集積している内陸部、かつ東北新幹線沿線の自治体であり、高校数や生徒数も多い。高校生卒業と同時に転出していくことに対して大きな問題意識を持っていた。しかし、基礎自治体は県立である高校・高校生との接点が希薄であり、アプローチ手法やノウハウが分からずに手を打てていない状況にあった。

そこで、令和4年度に本格導入された探究学習の科目である「総合的な探究の時間」や、探究学習の中でも実践型探求学習と呼ばれる「マイプロジェクト」を行った高校生と、地域をつなぐ新たな取り組みを行うことで、卒業・転出後も「関係人口」として地域に関わり続けられる仕組みを構築するニーズが高まっていた。

「マイプロジェクト」は地域をフィールドに活動を行う高校生が多く、卒業・転出前に地域での原体験や学びを深めることを通じて地域に対する愛着や想いを高め、関係人口への発展やUターン等につながるケースが岩手県沿岸地域で多数報告されている。このことから、地域をフィールドにした探究学習やマイプロジェクトを行う高校生等に対する、内陸地域からの新しいアプローチ手法の確立を目指して取り組んだものである。

【参考】「マイプロジェクト（通称：マイプロ）」とは？

主体性をもって、つくりたい未来に向けて「アクション（実践活動）」を行っていく学びのプロセスである。探究型学習の手法の一つとして全国に広がっており、高校生が自分自身の興味関心に基づき、身近な地域で活動を行うケースが増えている。

1.4 調査・検討すべき課題の設定

(1) プラットホームのあり方の調査・検討

探究型学習で「マイプロ」を行った高校生が、継続的に地域と関わりをつくるための具体的な手法（ツール、機会、仕組み）について、何が最適かを見つけ出す必要がある。

(2) ステークホルダーのニーズや連携方法のあり方

本事業では、事業実施地域の高校のほかに、市町村や県（教育委員会、知事部局）、探究型学習を支援する県内外の団体がどのような課題やニーズを保有し、また、これらの団体と連携することでどのようなパフォーマンスを発揮できるようになるかを具体的に見出す必要がある。

(3) 段階別に提供するプログラムの検討・実証

探究型学習における「マイプロ」を行うことで、地元への関心や継続的なつながりを構築するため、①高校2年生（マイプロ本格実施期）、②卒業間近の高校3年生（転出前のつながりづくり）、③大学生（継続して地元と関わる）の3つの段階に分けたプログラムを構築し、課題(1)で検討したプラットフォームへの参画導線を設計する必要がある。

(4) 継続的な運用モデル

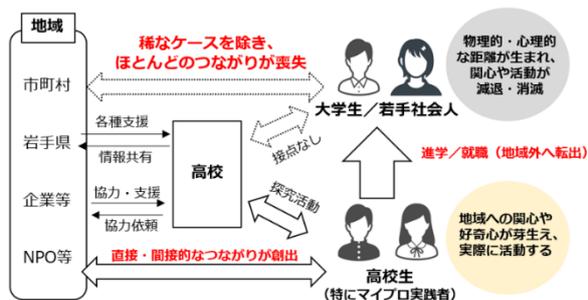
本事業によって構築したプラットフォームやプログラムを提供又は運用し続けていくための中間支援モデルと、ステークホルダーとの役割・機能分担を明確化する必要がある。

(5) 長期的な効果測定の方法

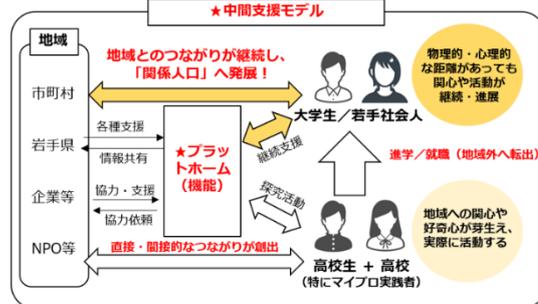
高校を卒業した世代が大学卒業後、又は社会人生活を送る中でどのような関わりが生まれ、関係人口やUターンにつながるかを測定することが重要であるため、長期的にプラットフォームに参画する10代～20代とのコミュニケーションが取れ、岩手との関わり具合を測定する方法について具体化する必要がある。

10代～20代のつながりの「現状」と「理想形」のイメージ図

■ 10代～20代の「つながりの現状」



★ 10代～20代の「つながりの理想形」

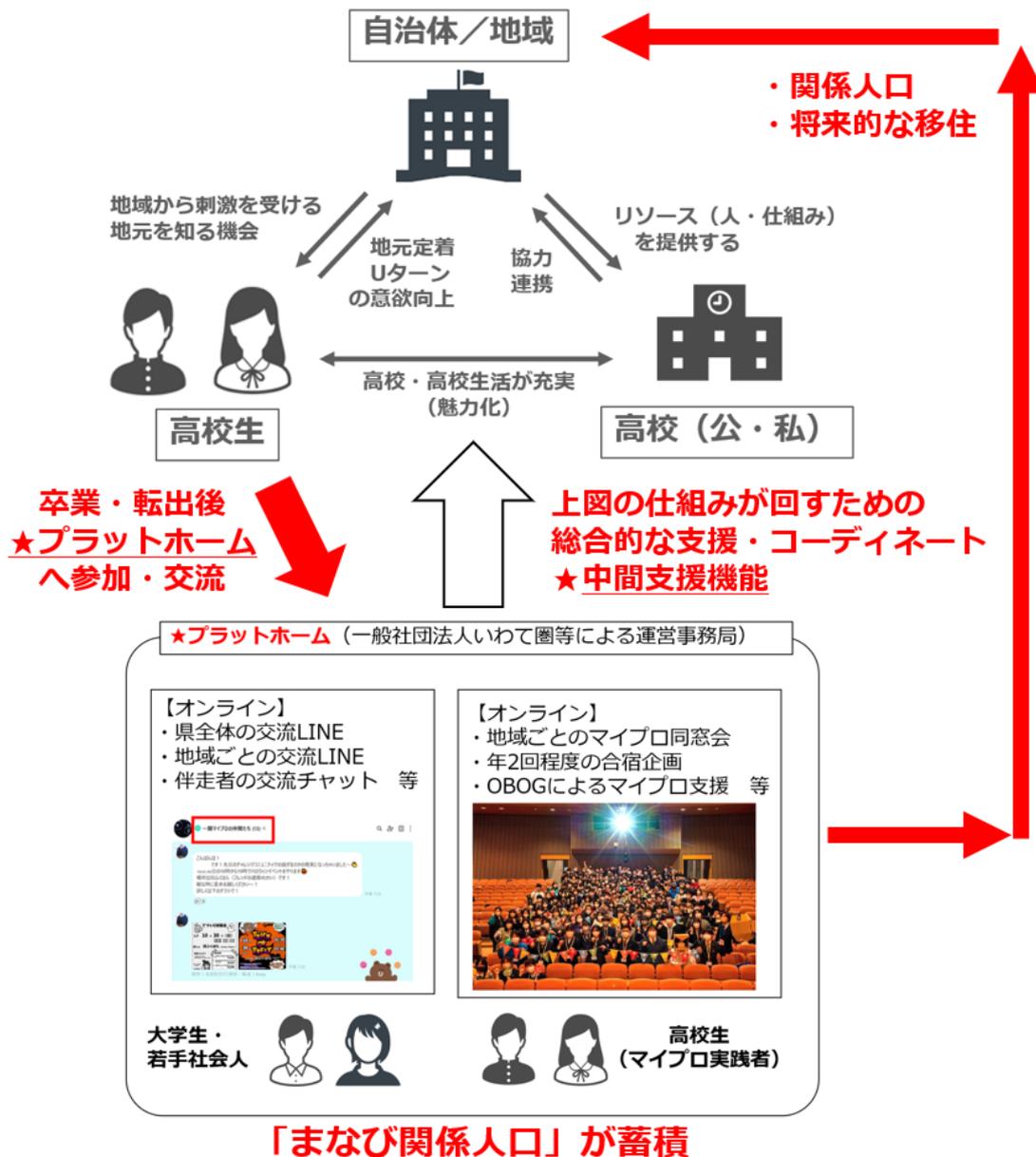


2 モデル事業の取組内容

2.1 取組の全体像

今後、岩手県内の高校を卒業し、転出する可能性のある高校生と、地域のキーパーソンがつながりを維持できる「中間支援モデル」と「プラットフォーム」の形成（下図）を目指し、

- ①まなび関係人口創出に向けた調査・検討
 - ②地域をフィールドにした「探究学習プログラム」の実施
 - ③長期的つながりプラットフォームの構築
- の3つの領域で取組を行った。

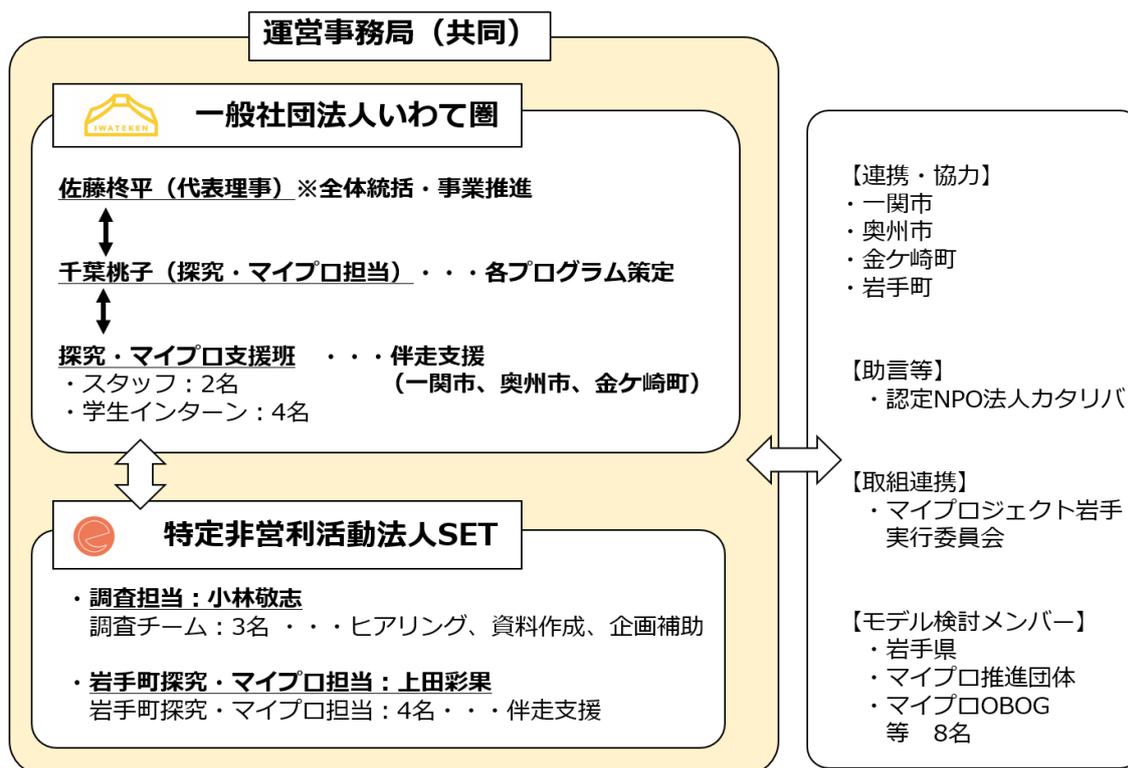


2.2 事業実施に係る運営体制

(1) 事業実施体制

本事業の実施にあたっては、岩手県内で探究学習・マイプロの支援等を行う個人や団体の中で、「関係人口」創出の観点有する、又は実際の活動を行うステークホルダーと連携して取組を展開した。

運営体制図



(2) 事業実施団体及び関係機関の役割

団体名	役割
一般社団法人いわて圏 (事業実施主体)	<ul style="list-style-type: none"> 事業全体の統括、各種業務の推進 一関市、奥州市、金ケ崎町におけるマイプロ伴走支援
特定非営利活動法人 SET (再委託)	<ul style="list-style-type: none"> 調査業務、岩手町におけるマイプロ伴走支援
認定 NPO 法人カタリバ	<ul style="list-style-type: none"> 探究学習やマイプロジェクトに関する助言・指導
自治体 (一関市、奥州市、金ケ崎町、岩手町)	<ul style="list-style-type: none"> 探究・マイプロの伴走支援や関係人口化に向けた情報共有や検討等の取組連携

フォローアップ等	<p>ヒアリング調査先から、後述する「モデル検討ワークショップ」への検討メンバーへの参加打診を行った。</p> <p>全箇所ではないが、検討状況や本業務のプログラム等へのオブザーブ参加等を促しながら、定期的に情報交換等を継続している。</p>
その他	※ヒアリング調査結果については、3.2 課題解決に向けた成果で説明する。

② モデル検討ワークショップの実施

項目	内容
趣旨	<p>高校を卒業・転出後も地域との関わりを持つ「まなび関係人口」の創出に向けた「中間支援モデル」と「プラットフォーム」の在り方について、課題感の共有や理想像のすり合わせを行うために実施した。</p>
実施内容	<p>実施期間 2022年9月27日～2023年1月31日まで</p> <p>回数 全体会：2回 / オンライン：5回</p> <p>場所 ・オフライン：いわて県民情報交流センター アイーナ ・オンライン：Zoom</p> <p>内容 ・1.4 調査・検討すべき課題の設定 に関する議論 ・中間支援モデルとプラットフォームの在り方に関する議論</p> <p>メンバー ・岩手県（地域振興室、定住推進・雇用労働室、教育委員会） ・ジョブカフェいわて ・マイプロジェクト岩手実行委員会 ・マイプロ OBOG ・高校魅力化等のコーディネーター (計11人)</p> <p>～ モデル検討ワークショップの様子 ～</p>

	
<p>広報・アプローチ</p>	<p>ヒアリング調査を行ったステークホルダーを中心にメンバーを依頼した。</p>
<p>その他</p>	<p>※ヒアリング調査結果については、3.2 課題解決に向けた成果で説明する。</p>

(2) 地域をフィールドにした「探究学習プログラム」の実施

地域（地元）をテーマに探究学習に取り組む高校生や、探究学習やマイプロジェクトを高校時代に経験し岩手との関わりを希望する大学生を対象として学年や段階別にオリジナルの「探究学習プログラム」を実施した。学年ごとに異なるプログラム内容を行ったため労力を要したが、地域に関わりを持ちたいニーズをもった多くの高校生・大学生に出会うことができた。

① 高校1～2年生向けプログラムの実施

項目	内容
<p>趣旨</p>	<p>本事業を通じて構築するプラットフォームに参加する高校1年生～2年生との繋がりを構築するため、地域をフィールドに探究学習やマイプロジェクトを行う希望を持つ高校生を対象に「探究学習プログラム」を実施した。</p>
<p>実施内容</p>	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラム：3地域（①一関市、②奥州金ケ崎地域、③岩手町）で実施 ・期 間：2022年7月下旬～2022年12月 ・場 所：各地域の市民センターや高校内にて ・参 加 者：48名 各地域10名程度（合計30名） <p>(プログラム内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回（7月）：オリエンテーション、テーマ設定 ・第2回（8月）：マイプロジェクトの企画・立案

- ・第3回（9月）：プロジェクト実施に向けたブラッシュアップ
- ・第4回（10月）：プランの具体化・実施準備
- ・第5回（11月）：個別相談・進捗共有
- ・第6回（12月）：リフレクション

(プロジェクトテーマ) ※一部

- ・高校生が楽しめるキラキラした商店街をつくる！
- ・ハピネス犬～保護犬活動の取組を広める～
- ・人間の人間による人間のための芸術
- ・作ろう！恐竜の町「いわて」
- ・福祉ネイルを広げて、繋げて

※ワークショップの様子（7月オリエンテーション）



※ブラッシュアップの様子（9月：高校生の活動を地域で応援する方法を検討）



特に、地域の様々な業界で活動する社会人との交流は、高校生だけでなく社会人にとっても大きな刺激になったという声を多数いただき、地域の中で賛同を得ていく手ごたえが強く感じられた。

広報・アプローチ

本プログラムに参加する高校生は、本事業の運営事務局である一般社団法人いわて圏と、特定非営利活動法人 SET が普段の探究学習・マイプロジェクト支援等で関わりのある高校の探究担当の先生を通じてアナウンスすることで参加者を確保した。

フォローアップ等	<p>プログラム終了後、「全国高校生マイプロジェクトアワード 2022 岩手県 summit」に出場を希望する生徒には個別フォローアップを行った。(2校から4プロジェクトが出場した。)</p> <p>また、継続して地域の中での活動を行うことを希望する高校生が、新たな学生団体を設立し現在も地域活動に向けた取組を準備しているため、当団体も継続して伴走支援を行っている。</p>
その他	<p>本プログラム参加者の中から、ハロウィンに商店街の遊休不動産を活用したイベント等を行うグループも生まれ、地域の中で注目された。</p>

② 高校3年生向けプログラムの実施

項目	内容
趣旨	<p>本事業を通じて構築するプラットフォームに参加する高校3年生とのつながりを構築するため、地域をフィールドに探究学習やマイプロジェクトを行いながら、卒業後も岩手との関わりを持とうとする3年生を対象に「探究・マイプロ個別相談会」を実施した。</p>
実施内容	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラム：3地域合同（1プログラム） ・期 間：2023年1月下旬～2023年2月（合計3回） ・場 所：オンライン（Zoom） ・参 加 者：4名 <p>(プログラム内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校時代に取り組んだ探究・マイプロの共有 ・今後の岩手との関わり方を感じるワーク ・進路の悩みや不安等の相談 ・今後の活動の壁打ち相談 <p>※イベント告知バナー（訴求を変えるため2パターン用意）</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

広報・アプローチ	運営事務局である一般社団法人いわて圏と、特定非営利活動法人 SET が普段の探究学習・マイプロジェクト支援等に関わりのある高校生を中心に声掛けを行った。一部、先生からの後押しがあり参加した高校生もいた。
フォローアップ等	LINE グループで継続的に交流を続けている。 また、進学先が仙台や首都圏だったため、各地域で対面での交流の場を設ける予定である。
その他	マイプロを行ったことで、後輩たちに協力したり、母校や地域のために役に立ったりする活動を希望する参加者がほとんどであり、今後の関係人口化が期待される。

③ OBOG 向けプログラムの実施

項目	内容																		
趣旨	高校時代に探究学習などを経験し、進学で県外に転出した大学生を対象に、岩手に関わる探究・マイプロづくりを行うことで、「岩手の外にいても岩手と関われる」状態を目指すプログラムとして実施した。																		
実施内容	<p>(概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラム：マイフィールドいわて ・対象：出身県を問わず、地域（岩手）で活動することに熱量や想いのある、現在、岩手県外に在住している大学生 ・場所：ハイブリット方式 ・参加者：7名 <p>(プログラム内容)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>日程</th> <th>内容</th> <th>場所</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>【説明会】10/18(火)・10/22(土) 19:00~20:00</td> <td>プログラムの全容を説明</td> <td>オンライン</td> </tr> <tr> <td>【第1回】11月上旬</td> <td>顔合わせ&目標設定</td> <td>オンライン</td> </tr> <tr> <td>【第2回】12/3(土)・12/4(日)</td> <td>対面合宿</td> <td>東京</td> </tr> <tr> <td>【第3回】1月中旬</td> <td>振り返り&成果発表</td> <td>オンライン</td> </tr> <tr> <td>【任意】1/22(日)</td> <td>マイプロジェクトアワード岩手県summit運営のサポート</td> <td>盛岡</td> </tr> </tbody> </table> <p>※参加学生の募集期間は、10/10(月)~10/29(土)23:59までです。</p>	日程	内容	場所	【説明会】10/18(火)・10/22(土) 19:00~20:00	プログラムの全容を説明	オンライン	【第1回】11月上旬	顔合わせ&目標設定	オンライン	【第2回】12/3(土)・12/4(日)	対面合宿	東京	【第3回】1月中旬	振り返り&成果発表	オンライン	【任意】1/22(日)	マイプロジェクトアワード岩手県summit運営のサポート	盛岡
日程	内容	場所																	
【説明会】10/18(火)・10/22(土) 19:00~20:00	プログラムの全容を説明	オンライン																	
【第1回】11月上旬	顔合わせ&目標設定	オンライン																	
【第2回】12/3(土)・12/4(日)	対面合宿	東京																	
【第3回】1月中旬	振り返り&成果発表	オンライン																	
【任意】1/22(日)	マイプロジェクトアワード岩手県summit運営のサポート	盛岡																	

	<p>※ワークショップ（合宿）の様子</p>  <p>住んでいる地域や大学・学年を超えて、「探究・マイプロ」は連帯感を生むだけでなく、岩手や後輩たちの役に立ちたいという想いを強くする動機付けとしても大きな効果を感じることができた。</p>
<p>広報・アプローチ</p>	<p>運営事務局である一般社団法人いわて圏と、特定非営利活動法人 SET が、これまで関わりを持った大学生や、高校時代にマイプロジェクトを行った経験者等に声をかけるとともに、SNS 等で積極的に情報発信を行った。</p>
<p>フォローアップ等</p>	<p>LINE グループに参加するとともに、全国高校生マイプロジェクトアワード 2022 岩手県 summit に参加し、現役高校生のサポート等を行うなど、継続的に探究・マイプロに関わる活動に参加している。</p>
<p>その他</p>	<p>大学生は高校生との距離感も近く、対話や交流を促しやすい関係・立ち位置になりやすい。今後は探究・マイプロ経験者の大学生向けコミュニティづくりを通じて「まなび関係人口」を増やすための方法を、本プログラムに参加した学生が検討を続けている。</p>

④ その他

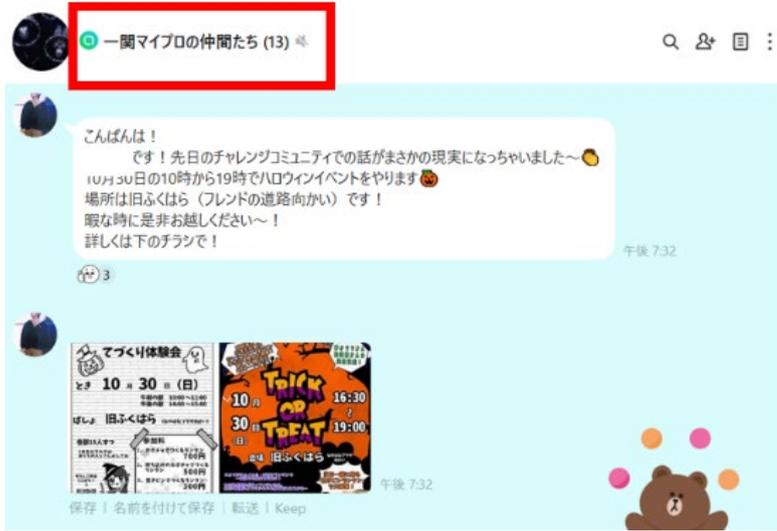
本事業の対象ではないが、「探究学習プログラム」に参加した高校 1 年～2 年生、OBOG を対象に、当団体が事務局を担当する「全国高校生マイプロジェクトアワード 2022 岩手県 summit」への参加を促し、高校生同士だけでなく、高校生と大学生・地域のキーパーソン等の交流や関係構築を行い、本事業の成果を高めるためのつながりづくりを補強・強化した。

(3) 長期的つながりプラットフォームの構築

「探究学習プログラム」に参加した高校生や大学生を対象に、継続的に地域との関わりを持つことができるオンライン環境の検討を行い、実際に運用を始めた。「まなび関係人口」として、岩手との関係を維持するためのプラットフォームとして「LINE」を活用した連絡ツールや運用方法を整備した。

① プラットホーム環境の構築・テスト運用

項目	内容
----	----

趣旨	<p>地域をフィールドにした「探究学習プログラム」に参加した高校生や大学生のうち、継続的に岩手との関わりを持ちたいと考える参加者と、伴走支援等に関わった地域の大人が様々な情報を受け取り、情報交換できるオンラインツールの整備を行った。</p>
実施内容	<p>■岩手全体の情報発信用アカウント（73名が登録中）</p> <div data-bbox="432 443 1121 600" style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>アカウント名 友だち ⇅</p> <hr/> <p> いわて圏くマイプロ・探究 73</p> </div> <p>※プログラム参加者以外の流入も 1/3 ほどある。</p> <p>■地域ごとのマイプロコミュニティ LINE グループ（一関の事例）</p> <div data-bbox="464 824 1241 1355" style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">  </div>
広報・アプローチ	<p>プログラム実施中に、参加者へ案内を行った。</p>
フォローアップ・その他	<p>オンラインツールは整備したが、オンラインのみでは交流の促進や継続に限界があることから、「対面での交流もセットでプラットフォームとする」という考え方を基本にプラットフォーム形成や運用を継続的に行うこととなった。</p> <p>■リアルな交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域ごとのマイプロ同窓会（自治体と連携し、首都圏や仙台圏で開催） ・岩手県内外から高校生・大学生を募るマイプロ合宿（岩手、首都圏で開催） ・全国高校生マイプロジェクトアワード 2022 岩手県 summit の開催 ・高校での探究学習支援に OBOG が参加するプログラム構築 等

② オンライン報告会の開催

項目	内容
趣旨	本事業に関わりのあったステークホルダー等に本事業の成果を共有するオンライン報告会を行い、今後の連携方法を確認した。
実施内容	(概要) ・日 時：2023年2月27日（月）15：00～16：30 ・場 所：Zoom ・参加者：11名 (内容) ・本事業の取組概要や検討結果の共有と質疑 ・今後の連携方法に向けたアイデア出しや意見交換
広報・アプローチ	本事業に関わった方を対象に告知して実施した。
フォローアップ・その他	「3. モデル事業としての成果検証」における考え方や、10代～20代と関わる上でのスタンスについて事業実施結果をもとに報告を行った。 また、今後も継続的に、「まなび関係人口」について議論や具体的な取組を深めたいという声が多数あり、令和5年度も財源の有無を問わず、何らかの方法で連携・協働した取組を行うことを確認した。 まだ始まったばかりの取組のため、さらに事業を深化させ、効果検証方法、自治体や企業との連携についてさらに研究を深める必要があるとの指摘もあった。

2.5 課題解決のための取組

(1) プラットホームのあり方の調査・検討

大人と高校生では、ツールに対するイメージや認識の差が大きいものもあったため、各プログラムの合間の交流を行う中で、高校生のインサイト把握に努めた。

(2) ステークホルダーのニーズや連携方法のあり方

書面によるアンケート調査ではなく、原則対面によるヒアリング調査に労力をかけることで、高校や行政、地域団体等のステークホルダーが抱える課題や本音を引き出すだけでなく、本事業への賛同や今後の連携に向けた前向きな関係構築を行った。

(3) 段階別に提供するプログラムの検討・実証

通う高校や学年が異なる場合もあるため、プログラム参加者同士に「仲間感」が生まれ、交流を通じた刺激や学びが醸成されることを意識した。大学生も、居住する地域や通学する大学、学年等が多様であるため、できるだけ「同じ時間を過ごしながら共通の原体験づくり」ができるプログラム運営を心がけた。また、プログラムに参加した高校生・大学生が地域のキーパーソンとのつながりを構築し、交流を深めることにも注力している。

(4) 継続的な運用モデル

今年度の取組を継続し、運営し続けていくために必要となる「財源」と「仕組み」の2点を中心に運用方法を検討した。検討にあたっては、岩手県内外の関連団体や取組の調査を行うとともに、必要に応じてオンライン等による情報交換等も行い、県外からのインプットを広く得ながら、岩手にローカライズする方向で議論・検討を深めた。

(5) 長期的な効果測定の方法

構築したプラットフォーム参加者について、「属人的な人間関係による把握・測定」と「仕組みによる把握・測定」の2つの観点で対応方法を検討した。

3 モデル事業としての成果検証

3.1 目標の達成状況

事業の目標・達成状況

目標	達成状況
<p>プログラムに参加する高校生・大学生</p> <p>【40名以上】</p> <p>※内訳</p> <ul style="list-style-type: none"> ■高校1年～2年生向け：20名程度 ■高校3年生向け：10名程度 ■OBOG向け：10名程度 	<p>【合計：48名】</p> <p>※内訳</p> <p>高校1年～2年生向け37名、高校3年生向け4名、OBOG向け7名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校1～2年生は探究学習が活発な学年という要因もあり見込みより多くの参加があった一方、高校3年生は就職・進学等の試験もあり、目標には届かなかった。 ・大学生については、夏休み等のまとまった時間がとりにくい時期の実施でなかったことが影響していると思われる。
<p>実施した企画に参加した高校生・大学生のうち、プラットフォームに参画する人</p> <p>【20名以上】</p>	<p>【合計：22名】</p> <p>LINEを活用したグループに参画し、高校生同士や地域のステークホルダーと交流を続ける高校生の人数である。</p>
<p>プラットフォームに参画する県内のステークホルダー</p> <p>【10名以上】</p>	<p>【合計：33名】</p> <p>本事業のプログラムへの参加・交流に加え、全国高校生マイプロジェクトアワード2022岩手 summitに協力した地域内外の社会人の参画が、大きく後押しする結果になった。</p>
<p>プラットフォームに参画する高校生の継続的なつながり意欲</p> <p>【80%以上】</p>	<p>【95%】</p> <p>プログラム終了時のアンケート結果により、高校卒業後も地域とのつながりを希望する意向が示された。しかし、年月の経過に伴う意欲の変化が予想されるため、フォローアップを充実させる必要がある。</p>

3.2 課題解決に向けた成果

(1) プラットホームのあり方の調査・検討

① オフラインとオンラインの融合によるプラットフォーム形成

プラットフォームはオフラインでの取組も含めて一体的に考える必要がある。オンラインだけでは継続的な関係構築に限界があり、定期的なリアルでの交流機会や時間を共有する接点づくりが非常に重要であるため、オンラインツールの活用はあくまで補足的なものであるという前提である。これらを年間スケジュールに反映させた運用を行うことで「プラットフォーム」の運営が可能になると考える。

② LINE を活用したプラットフォーム（コミュニティ）の形成

会話や交流が進むよう、「岩手全体」「地域ごと（市町村）」で分けて設置する形での運用を行うこととした。1つのグループで様々なやり取りが行われると、参加する人数の規模が大きくなった際に、通知の量や知らない人同士での連絡にハードルを感じ、コミュニケーションが希薄化する懸念があった。そこで、基本的に情報共有や行事等の案内を行うツールとして「県全体」のグループと、コミュニケーションを促しやすい「地域ごと」のグループで運用を分けることとした。

地域ごとのグループに分けたことで連絡のやり取りが活発に行われ、関係の希薄化を予防できた。

	岩手県全体のコミュニティ形成	地域ごとのコミュニティ形成
運営母体	本事業の運営事務局 ・ 一般社団法人いわて圏 ・ 特定非営利活動法人 SET	地域ごとに探究・マイプロの伴走支援をする地域団体や個人等
利用ツール	LINE グループ ※大人のみが参画する FB メッセージャーグループも併用	LINE グループ
参加者	・ 県内の伴走者 ・ 行政、教員関係者 ・ 高校生、OBOG	・ 地域内の伴走者 ・ 行政関係者 ・ 高校生、OBOG

【参考】検討したツール

ツールの検討においては、現在コミュニティ形成（主に連絡やコミュニケーションを軸とする）ツールとして活用されている「LINE」「Slack」「Faceook」を中心に検討を行った。基本的には、①誰でも利用しやすいこと（ハードルの低さ）、②コストがかからないこと、③コミュニケーション履歴が残ること、といった観点で高校生～大学生世代の利用のしやすさも考慮しながら検討を進めた。

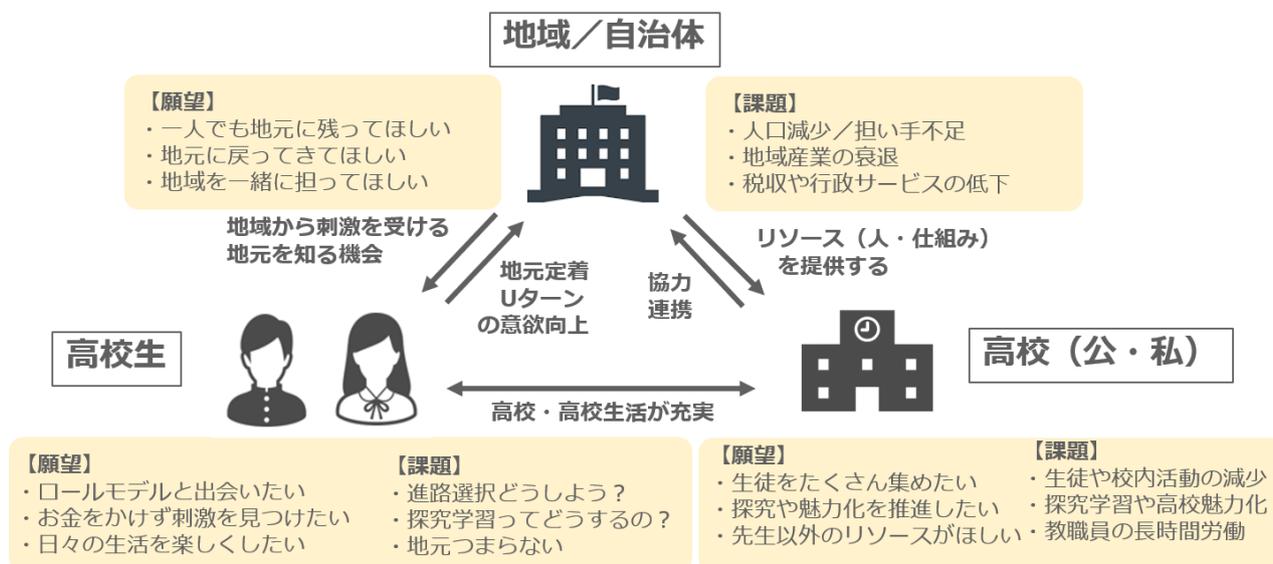
その結果、「LINE」が現時点では最適であるとの結論に至り、実験的運用をスタートさせることになった。比較した観点と評価は、下記の通りである。

ツール	メリット	デメリット	評価
LINE	利用者が幅広く利用しやすい	複雑なコミュニケーションが不可	◎
Slack	複雑なコミュニケーションに対応	無料版は会話の閲覧が半年以内	○
Facebook	メッセージとコミュニティ機能を併用した使い分けができる。	利用者が限定される (高校生の利用率は極めて低い)	△

現状ではLINEを選択しているが、今後もベストなツールを検討し続ける必要性がある。

(2) ステークホルダーのニーズや連携方法のあり方

① 把握したニーズ



② 連携のあり方

地域（自治体）と高校の現場（教員）、高校生本人の抱えるニーズや課題が3者で一致するポイントを探る必要性がある。どこかが一つでもかみ合わないと、いずれかのモチベーション（想い）が下がり、友好的な関係構築に至らない。そのコーディネートをを行う中間支援機能が重要である。

(3) 段階別に提供するプログラムの検討・実証

① 高校1～2年生向け

今回実施した「地域内の複数の高校の生徒が参加する長期間にわたるプログラム」は、高校ごとにスケジュールが異なるため、高校生の参加日程を確保する調整が極めて難航した。

今後、複数の高校の生徒が参加する場合は、夏休み等の休暇中、又は単発のスポット実施を軸に行うことが重要である。もし複数回のプログラムを行う場合は、半年ではなく3回程度を2～3か月間だけ行う、コンパクトなプログラムとして実施することが望ましい。

② 高校3年生向け

高校3年は受験や就職試験等の時期であり、基本的に多くの参加者は見込めない。生徒の背中を後押しするには、先生の協力や後押しも必要になるが、そうした余裕や考え方を持っている先生方は極めて少ない。しかしながら、卒業して転出する前の最後の1年間であることから、一人でも多くのつながりをつくるよう諦めずに取り組むことが求められる。

接点のない高校3年生へのアプローチは基本的に難しいため、1～2年生の頃からの関係づくりが大切である。3年間かけて関係を構築した高校生の中で、AOや推薦、総合型選抜等で進路が早期に確定した生徒にプログラム参加を促すことが重要である。

また、高校3年生は進路に関する悩みや迷いが大きくなる時期でもあるため、自分自身の進路選択や今後の生き方等を含めた相談や壁打ちの時間にもなるプログラムを実施することが望ましい。

③ OBOG 向け

探究学習を行った経験のあるOBOG（主に大学生世代）の中でも、マイプロを行い、「全国高校生マイプロジェクトアワード」の地域ごとのsummitや全国summitに参加した経験のある人はこうしたプログラムへの参加も積極的である。

一方で、大学生になってからこうした取組に強い関心を寄せ、関与を希望する大学生世代も多数いることがわかり、経験者と非経験者の目線や認識合わせを行いながらプログラムを実施することが重要であることが明確になった。

大学生世代は、地元の高校生に対する支援を行う動機付けやサポート意識も高い。現役で探究やマイプロに取り組む高校生を応援したり、伴走したりする立場で関与する機会を提供することが関係を継続するポイントになることが分かった。

(4) 継続的な運用モデル

検討テーマ	検討結果
財 源	<p>基本方針：「多様なファンドレイジング」による財務基盤の形成 (具体的施策)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自治体：地元出身者との関係づくりを行いたい行政機関の委託事業化 ・企 業：人材育成等に力を入れる企業や経済団体からのスポンサード ・助成金：高校生の探究学習支援に活用できる民間財団等への応募・申請 ・その他：高校生への教育支援を軸にしたふるさと納税メニューの設置
仕組み	<p>基本方針：まなび関係人口を増やすための伴走者の増加と情報共有</p>

	<p>(具体的施策)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各地域で探究学習やマイプロを支援する個人や組織(=伴走者)の増加 ・伴走者同士が定期的に情報や知見を共有できる定例会議の設置 ・伴走者と行政、教育関係者等による課題やニーズを把握したり、マッチングを促したりする機会の創出
--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(5) 長期的な効果測定の方法

検討テーマ	検討結果
<p>【方法1】 属人的な人間関係による把握・測定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・伴走者による半年に1回程度のSNSによるコミュニケーション活動。 <p>※高校時代に関係性がある人とは、地域との心理的距離感やキャリア等に関する話を引き出しやすいため。</p>
<p>【方法2】 仕組みによる把握・測定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・毎年1回行うオンラインアンケート調査 ・リアルで集まる機会でのアンケート調査 <p>※オンラインや対面で1年に1回程度、プラットフォーム参加者(高校生やOBOG)本人の現在地やニーズを把握する。特にリアルな場では定量的な調査に加え、定性的なインサイトを把握しやすいため、より一層リアルな場のセッティングが重要となる。</p>

3.3 その他の成果

(1) 探究テーマや活動内容が「地域(地元)」であるかどうかは関係ない!

当初は、地域(地元)をフィールドに探究学習を行う高校生や、高校時代に地域をフィールドにマイプロを行った経験のあるOBOG(主に大学生世代)を「まなび関係人口」とする仮説を持っていた。しかし、実際にプラットフォームに参加した高校生やOBOGのインサイトを把握すると、「地域(地元)をテーマにしていたかどうか」は関係なく、多様な関心・関与を持った人が参画した。

「地域に関心を持ち探究やマイプロを行った」から関係人口になるのではなく、「自分自身の本当の興味関心を軸に、思いっきり探究やマイプロを行った」から思いや熱量が強くなる人ばかりであった。そうした機会や環境があったからこそ、結果的に地域(地元)に関わりたいという思いが芽生え、その原体験が強ければ強いほど、関係人口として関与することにつながると考察される。

(2) リアルの場・機会が充実してこそ、オンラインのコミュニティが生きる！

今回の事業では、卒業・転出後の関係づくりを考慮し、主に「オンライン」でつながるプラットフォームのあり方を検討した。しかし、オンラインのみではむしろ関係が希薄化しやすく、まなび関係人口として有意義なプラットフォームにはならないことが予測されるようになった。SNS の発達やコロナ禍で様々なオンラインコミュニティが立ち上がったが、多くのオンラインコミュニティは関係性が深化する前に衰退し、活用されなくなってしまうケースが多数散見される指摘が多かった。その理由として「リアルな原体験」による意識の醸成とコミュニティの共通言語の獲得が適わず、コミュニケーションが希薄化するからである。

全国高校生マイプロジェクトアワード等をはじめとする、探究学習やマイプロに関するリアルな交流の中でつながりが生まれることが、参加者の大きな原体験になっていることが分かった。高校時代にマイプロを行い、地域の中で活動を行っていた高校生（現大学生世代）たちからは、同じマイプロを行っていた同世代同士や地域の伴走者との連絡先の交換や SNS でのつながりを独自につくり、継続的に関わりや交流を持っている人が多数であった。皆、「マイプロ」という共通の原体験があり、その感覚や経験を共有できるからこそ、オンラインでの交流も頻繁に行われる土壌ができています。定期的にリアルで顔を合わせ、対話や交流を行う機会があることで初めて、オンラインのコミュニティでの会話や交流が活発になることが確認できた。

4 今後の事業のあり方

4.1 自立化・自走化の検討

本事業では、自立化・自走化に向けて下記の観点で検討を行った。

観点	可能性	課題
①省力化した運営方法	・マイプロ等の関連業務と一体的な運用	・運営事務局と連携・協働する県内各地の団体やコーディネーター組織（個人）の確保
②継続するための財源確保	・多様なファンドレイジング (3.2 を参照)	・営業、PR の体制構築 ・各セクターのニーズやキャッシュポイントの把握
③情報の蓄積と共有	・10代～20代のリスト共有化 ・フォローアップの連携・協働	・情報セキュリティ環境の構築

4.2 横展開の可能性

本事業の検討結果をもとに、横展開の可能性についても検討を行った。

① 岩手県内での横展開

- ・「10代～20代のまなび関係人口」に関心を寄せる県内の企業・各種団体・行政機関等との協働関係の構築。（連携体制構築に向けた積極的な提案やリレーション構築に注力。）
- ・学校教育機関（高校等）に加え、社会教育機関（公民館や地域交流施設等）との連携強化。

② 全国における横展開

- ・認定NPO法人カタリバが実施する「マイプロジェクト地域パートナー制度」に加盟する組織（岩手県以外で19県で活動を実施中）に対するナレッジや仕組みの共有・提供。
- ・当団体が運営する「都道府圏コミュニティ」に加盟する、関係人口創出に関わる団体を通じた他県への普及。
 - ※「都道府圏コミュニティ」は一般社団法人いわて圏、一般社団法人いがた圏、一般社団法人滋賀圏、一般社団法人とっとり圏が加盟。今後も増加予定。
- ・探究型学習・マイプロジェクトを通じた「まなび関係人口」の創出は、新しい関係人口の領域ゆえに、理解・普及に時間がかかるため、一緒に普及・拡大に取り組む個人・組織との協働関係構築とナレッジの共有が必要不可欠。